

夏の果樹園 ● 桑野智章

さつきまで隣に立っていた君の影だけ地面にうつすらのこる咲くことが使命と聞いて向日葵は丘に立つなり朝日をあびてこしらえてまたこしらえて涙ぐむ顔のつくりはむかしと同じお気に入りの物がいくつかあるはずと君は見回す夏の果樹園金属のおおきな鳥がとんでゆく生身のとりが集うむこうを輝くことをゆるされたのか廃駅に今年は咲けり紅きカンナはいつせいに運動場に放たれて園児は山羊よりすばやくはるるきよう出会い誰かに教へん夏の陽に溶けそうになる布袋葵を籠の中に夏の思い出あつたはず土手に横たわる朽ちた自転車ひとつきの安らぎ求め街にでる骨董屋にみる白磁のくもりにんげんの心の中に住むという小さな人形あるかせてみる語らざる二人であれど代る代る穴を覗けりマンホールの闇いつしかに脹らみている積乱雲その足もとははつきりとせず近景にコーラ、遠景に海があり、やつぱり君は夏というのだ鋭き棘も老木となり丸くなる棘なし薔薇もあるというのに滑らかにかたつむり這う八手の葉帰つてこいと昔をおもう水の辺に獸の足跡みつけたり小さきサンダル履きしけものか点描の風景の中を歩きおりわれの身体はドットとなりてもめごとは日常のこと絡みたる蔓をほどいて果樹園の畠同じ顔の繰返しではないことは分かつていたさ君は季節で